

小学校外国語活動において、教師はどのような時に 成功感と失敗感を感じているか

猪井 新一*

(2014年9月16日受理)

When Do Elementary School Teachers Feel That Their Foreign Language Activities are
Successful or Unsuccessful?

Shin'ichi INOI

キーワード: 外国語活動, 成功, 失敗, TT

本稿は、小学校教師が外国語活動の授業がうまくいったと感じたり、あるいは、うまくいかなかったと感じたりする時は、一体どのような時かについて、アンケート調査の自由記述項目への小学校教師の回答例を分析し、外国語活動の改善策を検討するものである。データはカテゴリー化はするが、量的分析はせず、典型的な回答例や特徴のある回答例を取り上げる。うまくいったと感じる回答例、および、うまくいかなかった場合の回答例をそれぞれ9つのカテゴリーに分類し、とりわけ、うまくいかなかったとする回答例の背後にある原因についてできるだけ言及する。そして、過度なALT依存型の外国語活動の授業を改善するためには、次のよう対策が考えられる。英語の表現を使う必然性のある場面を設けること、ALTに授業を任せないこと、ALTとの打ち合わせの時間を確保すること、スキル養成を主眼としないこと、コミュニケーションを図ろうとする態度の育成をすること、学級担任の英語運用能力を向上させること、校内外の教員研修を確実に実施することなどである。特に、教員研修については、長期的視野に立って実施する必要がある、国の施策として、人・予算をかけることが望まれる。

はじめに

平成23年度から小学校5,6年生を対象に、年間35時間単位の外国語活動の授業が必修化され、今年度で4年目を迎える。小学校教師の9割以上が英語の教員免許を持たない状況の中¹⁾、外国語活動はALTとのチームティーチング(TT)を中心に実施されることが多い。外国語活動の必要性や外国語活動における学級担任の役割の重要性を認識しつつも、ALTを活用するどころか、依然として授業をALTにほぼお任せにするような実態を見聞きすることがある。例えば、教育委員会の指導主事などの

*茨城大学教育学部

学校訪問や公開授業のような時は、学級担任がT1として教室の前に立ってTTで授業を進めるが、普段の授業はALTに任せ、学級担任の役割は児童に活動に参加するようにとの声掛けで終わるような場合がある。学校によっては、外国語活動は学級担任の空き時間になることもあると聞く。さらには、ALTの雇用形態(業務委託型)によっては、学級担任は授業中にALTに対して、法律上指示することができないため(矢野, 2011), その意図はなくともALTに授業をお任せせざるをえない場合もある。筆者が実際訪問したある市では、まさしくこの業務委託型ALTを雇用しており、外国語活動の授業では、最初の5分程度学級担任が本日の目当てと授業の流れを板書し、児童にそれを確認させ、その後はALTに授業を任せる状況である。そして、授業終了5分前頃に再度担任の先生が児童の前に立ち、児童に当日の授業の振り返りをさせるのである。ALTによる授業の展開中は、学級担任は児童に声をかけたり、児童と一緒に活動に参加はするが、英語を用いてALTとコミュニケーションをしようとする姿を児童に見せることはないのである。そうすれば、法律違反となる。このように、なかなか学級担任を中心に外国語活動が行われず、過度なALTへの依存型の授業となってしまうが、その原因の一つに、現時点では外国語活動は領域であり、国語や算数などのように正式な教科ではないことがあるかもしれない。外国語活動の教科化の件は文部科学省および中央教育審議会等の議論に委ねるとして、本稿は、少しでもそのような外国語活動の現状を改善すべく、取り組むものである。

平成25年1月～3月にかけて、外国語活動に関する小中学校連携に関する全国規模のアンケート調査を実施したが²⁾、そのアンケート調査項目の中に指導者はどのような場合に、外国語活動の授業が成功した、うまくいったと感じ、一方うまくいかなかったと感じているのかについての自由記述項目が含まれていた。本稿の目的は、その自由記述項目への回答例をカテゴリー化し、典型的な回答例や興味深い回答例を示しながら、外国語活動の改善策を考えることである。授業がうまくいったと感じる場合の回答例の中には、児童が生き生きしている時や楽しんでいる時などの回答例が見られたが、一体どのような指導をすると、そのようになるかについての具体的な記述例があまり多くは見られなかった。しかし、中には具体的指導法についての回答例がみられ、そのままでも大いに参考となると思われる。一方、このようにすると授業がうまくいかなかったと感じることについての記述例は、相当数観察された。本稿ではどのようにしたら、それらの失敗例を引き起こさないようになるかについても言及したい。このような外国語活動の成功例や失敗例を共有化することそれ自体が、外国語活動をより良いものにしていくための一助となることを期待するものである。

先行研究

外国語活動の活動例に関する指導案やその実践報告はたくさんあるが、このようにすると成功する、あるいは失敗するとのいうものはそれほど多くはない。その中でも金森(2011)の書は大変参考となる。外国語活動が成功する55個もの「秘訣」、いわば指導法を紹介している。例えば、よりよいTTを実施するためには、学級担任の先生の役割に関して、TTのイニシアチブをとる、ALTと学級担任の役割分担を巧みに行う、ALTや外部日本人教師(JTE)と十分な共通理解を図り、人間関係を築くことなどが大切であると述べている。逆に、そのようにしないと、外国語活動は成功しないとも述べている。さらに、氏は、児童の授業理解に関して、オールイングリッシュで行う授業は子供の理解をはるかに超えてしまい、難しすぎて

英語嫌いな児童を作ってしまうと述べ、適切な日本語使用を求めている。発音指導に関しては、過度な発音練習や個々の子音・母音などの発音指導はあまり効果がなく、かえって児童のコミュニケーションへの意欲を損なってしまうことになる」と述べている。これらの氏の提案する指導法は、「外国語活動で大切にしたいのは、『スキルの獲得』よりも、『コミュニケーションの体験によってしか育まれない、人と関わるという基本的なコミュニケーション能力の育成』と言えます。」(金森, 2011, p. 18)という、氏の主張に基づいている。また、これらの指導法は、氏のそれまでの小学校英語教育との関わり(小学生への指導, 教材研究, 中央教育審議会外国語専門部会委員等)を通しての、自らの経験に基づいて述べているものであり、かなり説得力がある。

本稿は、公立小学校の 5, 6 年生担当の小学校教師から協力していただいた全国規模のアンケート調査結果の一部を分析したものである。外国語活動がうまくいったと感じたり、うまくいかなかったと感じたりする時の教師の回答例は、金森氏の提案する外国語活動が成功する指導法とかなり重なりあう部分があると予想される。同時に、現場の小学校の先生ならではの回答例も期待される。多くの教師の指導経験から、外国語活動がうまく行ったり、うまくいかなかったりする指導法がわかり、それを指導者が共有することは、外国語活動をよりよいものに推進していく上で、大変意義深いと思われる。

データ収集・分析

平成 25 年 1 月から 3 月にかけて外国語活動に関する小・中学校連携の全国規模の調査を実施した。もともとは小中連携を目的としてのアンケート調査であったために、小学校教師(主に、5, 6 年生学級担任)、中学校教師、ALT からそれぞれから回答が得られたが、本稿では小学校教師 1,802 名からのデータのみに着目する。しかも、以下の自由記述項目への回答のみに限定している。

1. 先生が外国語活動を指導されていて、成功した、うまくいったと感じるのは、どのような時ですか。その理由を含めて、できるだけ具体的に書いてください。
2. 先生が外国語活動を指導されていて、うまくいかなかったと感じるのは、どのような時ですか。その理由も含めて、できるだけ具体的に書いてください。

これらの質問項目への回答例は、上述したように、基本的にカテゴリー化し、典型的な回答例や外国語活動を改善する上で参考となるものを取り上げ、回答例の量的分析は実施しない。その理由は、仮に量的分析をしたとしても、回答数の多いものを順に列挙するだけとなり、外国語活動を改善する上であまり有益ではないからである。それよりはむしろ、数少ない記述例でも、外国語活動改善のためのヒントとなるものであれば、積極的に取り上げたい。

結果

1. うまくいったと感じる時の回答例

授業がうまくいったと感じる時の教師の回答例をカテゴリー化し、典型的な回答例を示す。うまくいったと感じる記述例の多くが、外国語活動の児童や学級経営にもたらす良い面に言及しているが、具体的にどのような指導をするとそうなるかについての記述例は少ない。

1) コミュニケーションを図ろうとする態度に関する記述

- ・英語を使って児童が日本語ではできないコミュニケーションを友達ととれた時。
- ・子供が教科以上にふれあっている姿を見た時。
- ・児童が外国語というツールを通して、友達との関わりを楽しんでいる時。
- ・うまくなくとも、知っている英語やジェスチャーでなんとかコミュニケーションをとろうとしている姿を見た時。

これらの回答例のような児童の姿を見ると、学級担任は外国語活動の授業がうまくいったと感じるのである。回答例はいずれも、児童のコミュニケーションを図ろうとする態度に関するものであり、まさしく外国語活動の目標(文部科学省, 2008, p. 7)に合致するものである。しかし、残念ながら、どのようにすればそのようになるかについての具体的指導法についての回答例は、ほとんど見られなかった。

2) 楽しさ・積極性・意欲に関する記述

- ・英会話を楽しむ子供の表情が生き生きしている。
- ・子供たちが笑顔を活動している姿が多くあった時。
- ・積極的にコミュニケーション活動に取り組んでいる。
- ・子供たちがたくさん英語にふれ、終了後に楽しかったといった言葉が聞けたり、表情が見れたりした時。
- ・ゲームが楽しくて、もう一回やりたいと子供が言った時。

外国語学習の授業に積極的に参加し、楽しんでいる児童の姿を見ると、学級担任は授業がうまくいっていると感じのがわかる。外国語学習は楽しいと児童が体験することが大切であるが、これは他教科にも当てはまる。国語、算数、理科等の授業においても、児童が生き生きと学習に取り組んでいたら、学級担任は授業がうまくいっていると感じると思われる。この種の回答例についても、具体的指導法について明確に言及している回答例はあまり見られなかった。

3) 英語への慣れ親しみに関する記述

- ・授業が終わってからも歌を歌ったり、単語を言っている。
- ・授業をした後に、子供たちが自然と英語を口にした時。

これらの回答例を通して、児童が授業中、歌などを通して、何度も英語の音声にふれ慣れ親しんだた

め、授業終了後も、英語を口ずさんでいるのがわかる。外国語活動の目標の一部である「外国語の音声や基本的な表現へ慣れ親しませながら」(文部科学省, 2008, p. 7)を具現化した記述例といってよいであろう。これらの記述に関しても、アンケート結果では具体的指導法は見られなかった。金森(2011)は、歌を用いた指導に関し、歌を選ぶ際は、短いフレーズで繰り返しが多い歌、児童がすでに親しんでいる語彙や表現を用いた歌などを提案しているが(pp. 152-153)、具体的な曲名までは言及していない。

4) 学級経営に関する記述

- ・男女の仲がより深まった時。
- ・進んで友達と関かかわった時。
- ・基本、学級経営がとても大切。6年生でも歌やチャンツが楽しめる。
- ・英語劇やジェスチャーの練習などで、表現したり、仲間と協力する姿が見られたとき。

これらの記述例は、外国語活動と学級経営は密接に関係していることを表している。外国語活動を通して、クラス内の友人関係が良くなり、皆で協力し合うようなクラスの雰囲気醸成されると、外国語活動の授業がうまくいっていると学級担任は感じているのである。どのようなクラスをつくるかという学級経営は、学級担任の役割がとても大きく、その意味で、外国語活動においても学級担任の存在はとても重要である。外国語活動においては、学級担任は英語のモデルではなく、英語を使おうとする学習者モデル(直山, 2008, p. 27)、あるいはコミュニケーションのモデル(金森, 2011, p. 36)になることが期待されている。そのようなモデルに学級担任がなろうと努めることは、児童に安心感を与え、和やかなクラスの雰囲気を作ることにつながり、結果として、望ましい学級経営につながるのではないかと期待される。

5) 気づきに関する記述

- ・授業中に新しい発見があった時(文化面、友人など)。そして、みんなで共感し合う場面がある時。

外国語活動を通して、児童が外国の文化について日本の文化とは異なる面を理解したり、友達について好きな食べ物とか動物とか教科等について、新しい面を発見し、それをクラス内で共有し合う時に、授業がうまくいったと感じた回答例である。外国語活動はただ単に英語の学習ではなく、文化的なものや友達との人間関係なども含めたより広い観点から授業を行うことの大切さを示している。さらに、新しい発見をクラス内で共感し合うというのは、クラスの集団力を高め、クラス内の雰囲気をよくすることになり、まさしく学級経営の一部といってもよいと思われる。

6) TTに関する記述

- ・打ち合わせがうまくいき、自分自身の授業のイニシアチブをとった時。
- ・子供がALTの言葉を聞き取る際や英文を作成するポイントをうまく助言できた時。

授業がうまくいったと感じる時のTTに関する回答例はあまりなかったが、上のような回答例が見られた。一つ目の回答例からは、TTにおいて通常は、ALTが主導権を握っており、なかなか学級担任が主導して授業を進めることができていないことが読み取れる。この記述例からは授業がうまくいったと感じる時は、

学級担任が中心となって授業を進めることができた時である。そのためには、ALT との打ち合わせは必要であり、その際に学級担任がどのように授業を進めたいとの思いを ALT に伝える必要がある。往々にして、学級担任の英語力が原因で、その思いが ALT に十分に伝わらず、学級担任の意向とは別の方向へ授業が進展してしまうことがある。金森(2011)も、TT においては小学校教育の専門家である学級担任が中心となり、全人教育の視点から授業を進めるべきであるとし、専門的知識をもたない ALT に教育を丸投げすることは許されないと主張し(pp. 68-78)、授業がうまくいったと感じる時の上述の記述例と一致している。

二つ目の回答例からは、学級担任が児童に適切な助言をすることができた時で、おそらく助言を言うタイミングも適切であったと思われる。ALT との打ち合わせのことには何も言及していない回答例であるが、おそらく十分な打ち合わせができていたと思われる。

7) 児童の活躍の場に関する記述

- ・特別支援学級や他の教科で苦手意識を持つ児童などが、外国語活動で積極的に取り組んだり、コミュニケーションしようとしている。
- ・普段発表しない子供がゲームやコミュニケーションで生き生きしてと発言している時。
- ・他者とのコミュニケーションに積極的ではない子が、みずから相手を求めて英会話を成立させようとしている時。
- ・声の小さい自信なさげの子が、笑顔を楽しく活動している時。

これらの回答例は、上述の「1) コミュニケーションを図ろうとする態度に関する記述」のカテゴリーに含めてもよいのだろうが、他教科の授業では発言等にあまり積極的でなく自信のない児童に、外国語活動はあらたな活躍の機会を提供しているという点で、このカテゴリーを設けた。このような回答例からも、外国語活動は、単なる英語学習ではなく、いろいろな児童に人と関わる、すなわちコミュニケーションを図ろうとする機会を与える可能性をもっていることを示している。外国語活動の児童に与える良い側面と云ってよいであろう。

8) 有能感・成就感・達成感に関する記述

- ・児童が ALT の話す内容をジェスチャーから何となく意図をくみ取り「あー、そうかな」と分かった時。
- ・英語での質問に英語で答えることができた。
- ・英語に苦手意識を持っている児童が「できた」と喜んだ時。
- ・子供が ALT と英語で意思疎通できたのを見た時。
- ・スピーチやリスニングを自信をもってできたという達成感がある時。
- ・子供が ALT と英語で意思疎通できたのを見た時。

これらの回答例は、いわゆる英語学習における「～ができた」という達成感である。外国語学習は英語のスキル養成を第一の目的とはしていないが(金森, 2011, p. 13; 文部科学省, 2011, p. 19), 英語のスピーキング力やリスニング力が外国語活動の結果として、身に付くことにこしたことはない。児童が達成感を味わうことができれば、さらに英語学習をしようとする意欲にもつながる。ただ、週 1 回の授業ではな

かなか英語のスキル養成は難しいところがあり、このスキル養成を全面には出さない方が良いと思われる。そうでないと、多くの英語が苦手な、英語嫌いの児童を生み出してしまふ恐れがある。

9) 教材・指導法に関する記述

- ・ “Good job” シールの活用。挙手であったり、チャンツであったり、頑張っている児童に配布。子供にとって、意欲が喚起され、クラスの雰囲気はどんどん良くなる。
- ・ 英語ノートパソコンで共有して、色や洋服をゲーム化して覚える授業。
- ・ ゲームをしながら、そのゲームを進めるにあたり必要性を感じ、知らず知らず英単語を覚え使った。6年生の道案内のところ、すいか割りのゲームを行い、“Go straight,” “Turn left,” “Turn right”の表現を使用した。
- ・ お店屋さんごっこで、売る物を子供たち自身で作った。お店屋さんも自分たちで決めた(ペットショップ、文房具屋、洋服店、etc.)。自分たちでする作業があるとよい。

以上は数少ない、授業がうまくいったと学級担任が感じる時の具体的指導法についての記述例である。いずれも指導法が具体的であり、明日の授業ですぐにでも活用できるものばかりである。シールの活用は、児童の学習意欲を喚起すると言われている。パソコンによる教材の共有化は、指導者同士の連携である。ゲームでは、その表現を使う必然性のある場面を作り出している。お店屋さんごっこでは、児童自らがお店屋さんを決定しているなど、児童が教師から与えられたものだけではなく、自分たち自身も授業に積極的に参加していることがわかる。

場面にふさわしい表現を使用する必然性を作り出すことは、意外に難しい。これは、指導者である学級担任自身がそのような学習体験をあまりしていないことが考えられる。中学校、高校、大学の英語の授業において、いわゆるコミュニケーション中心の英語の授業をどれだけ受けてきたかについては相当疑問が残る。いずれにせよ、ある表現を使う必然性のある場面を作り出すことは、授業の成功につながる要因の一つとなっていると思われる。

以上、外国語活動の授業がうまくいったと感じる時の小学校教師の回答例を、9つのカテゴリーに分け、典型的なものや役に立つと思われるものを記述した。カテゴリーは1) コミュニケーションを図ろうとする態度に関する記述、2) 楽しさ・積極性・意欲に関する記述、3) 英語への慣れ親しみに関する記述、4) 学級経営に関する記述、5) 気づきに関する記述、6) TTに関する記述、7) 児童の活躍の場に関する記述、8) 有能感・成就感・達成感に関する記述、9) 教材・指導法に関する記述、である。外国語活動を通して、児童はコミュニケーションを図ろうとする態度を養い、英語学習の楽しさを体験し、さらには英語の音声に慣れ親しむことが可能となる。また、外国語活動は他の教科の授業ではあまり自信のない児童に、活躍の場を与える機会にもなっている。さらには、外国語活動を通して、クラスの集団力が向上し、雰囲気が良くなることもある。そのような外国語活動の児童やクラスに与える良い面に接する時、学級担任は授業がうまくいったと感じるのである。また、TT指導においては、担任の意向が授業に反映された時も授業がうまくいったと感じている。外国語活動には、当然のことながら英語学習の面も含まれるから、児童の「～できた」という成就感・達成感にふれた時も、学級担任は授業がうまくいったと感じている。

一方、このような指導をすると授業が成功したと感じることに具体的記述例は少なかった。唯一、9) 教材・指導法に関する記述のカテゴリーにおいて、いくつか具体的な指導法についての言及が見ら

れた。その中でも、英語の表現を使う上で、その表現が使われる場面を作り出すことが重要であり、授業の成否と大いに関係がある。金森(2011, p. 93)も同様に、ことばのやり取り、すなわち、コミュニケーションの必然性のある活動が大切であり、その具体的活動例にも言及している。いかんにして、そのような場面を設定するかは、小学校の外国語活動のみならず、コミュニケーション重視の英語教育にあつては、中学校、高校、大学も含め、英語教育上あらゆる場面においてとても重要である。

2. うまくいかなかったと感じる記述例

今度は、授業がうまくいかなかったと感じる時の学級担任の回答例を類型化し、紹介する。また、なぜそのようになるのかについて、その原因についても可能な限り言及をする。

1) 児童が授業がわからないことに関する記述

- ・「わからない」「覚えられない」「苦手」と声を出された時。
- ・子供が授業がわからず、首をかしげている時。
- ・ALT が英語で話しかけても、何を言っているのか理解するのに時間がかかり、意欲低下。聞き取る力が育っていない子は苦痛。
- ・英語だけの説明で子どもたちが全く何をしているのかわからず、担任がフォローできない時。
- ・ALT が一人でつぶしてしまって、子供がしらけている。事前の打ち合わせをしても、担任が理解できない時。
- ・ALT が主に行っているが、英語が理解できず、子供たちが困っている時。
- ・ALT が英語で説明したゲームなどのルールが十分にできないまま進んでしまい、子供が集中できなかった時。

これらの回答例からは、児童が授業の内容を理解できていない姿がみてとれる。その原因は複数考えられるが、一つにはTTの授業において、ALTが中心となり、オールイングリッシュで授業を進めるような場合ではないかと推測される。おそらく、学級担任とALTの打ち合わせも十分ではなく、学級担任もその授業をどのように進めるかについて、あまり認識していないのではないかとも思われる。仮に、授業の進め方について担任の思いはあったとしても、それがALTに十分伝わらず、結果として、上述のような回答例になっている可能性もある。学級担任が授業の内容や進行をコントロールし、その授業の目標をALTに理解してもらうことは必要であり、その意味でもALTとの打ち合わせはとても重要となる。当然、ALTとの打ち合わせをする上での、簡単な英会話力が学級担任に求められるのだが、これが一朝一夕には達成されず、長期的視野が必要である。金森(2011, p. 77)は、ALTとの打ち合わせの時間は学校として確保する必要があると述べ、ALTと意見を出し合いながら協働して授業実践をすることを勧めている。

2) 児童の反応に関しての記述

- ・子供たちが静まり返っている。
- ・発言がない。
- ・声がでない。
- ・一人一人の言語活動が少なかった時。

- ・子供たちがつまらなそうにしている。

これらの回答例は、授業がうまくいったと感じる時の回答例カテゴリー「2) 楽しさ・積極性・意欲に関する記述」の正反対に属する記述例である。なぜ、このようになるかの原因の一つに、上述したように、授業の内容がわからないことがあげられる。ALTが中心となり、ひたすら英語で授業を進めれば、児童は何が起こっているのか理解できず、児童の反応がなくなってしまうのは当然である。もちろん授業が分からなくなる原因には、これ以外の理由も数多くあると思われる。次では、授業がわからなくなるとされる指導内容・指導法についての記述例に言及する。

3) 指導内容・指導法に関する記述

- ・単調な単語学習や簡単なスペルの勉強をやった時。
- ・扱う単語数が多いと、意欲がそがれる。
- ・リピート練習が主となってしまった時。
- ・一方的に英語を言わせて、子供たちの活動が少なかった時。
- ・教科指導のように単語やセンテンスを覚えていることを前提に、単元の学習を進める時。
- ・文法(複数形, be 動詞など)を教えようとした時。
- ・長めの単語やフレーズを無理に使わせようとして、子供たちが難しい、無理だという反応をした時。
- ・綴りの指導(書かせる活動はアルファベットもままならないので、児童には難しい。)
- ・発音に重点をおきすぎる時。
- ・[l]と[r]の発音などは児童には難しい。
- ・子供に知識だけを教え込むだけの授業。
- ・英語を教え込もうとする時。
- ・教え込んだり、覚えたりすることに力を入れてしまった時。
- ・ALT が高いレベルの英語学習を求め、楽しい活動というより習得型の授業になっている。
- ・他教科とのつながりを活かしきれない時。
- ・無理に言わせようとすると、子供たちがなかなか意欲的にならない。
- ・ことばの暗記に終わった場合。

これらの回答例は、外国語の授業がうまくいかなかったと感じる時の回答例である。単調な単語学習やリピート練習、単語や文を暗記させるような指導法、綴りや文法指導、過度な発音指導など、いずれも中学校で行う英語学習の前倒しのような指導法・内容である。週一回の授業で、英語の学習事項の定着を図ろうとすると、回答例の中にあるように、「英語を教え込む」ことになり、学級担任は授業がうまくいかなかったと感じている。小学校における外国語活動は、英語の学習事項の定着を求めるのではなく、英語を用いてのコミュニケーション活動は楽しいという体験を児童にさせることが大切となる(文部科学省, 2008, p. 10)。学習事項の定着を求めるあまり、暗記やリピート練習で英語嫌いな児童を作ってしまう可能性がある。小学校段階においては、英語のスピーキング力養成は求めず、英語の音声に何度もふれ、慣れ親しむことを目標にすればよい。金森(2011)は、指導法として、音声と文字を結び付けるフォニックス指導に言及し、授業が週1回しかない小学校段階ではそのような指導は児童へ過度な負担を与え、英語が苦

手な児童を増やすとも警告する(pp.114-115)。同様に、学習指導要領でも、発音と綴りの関係は中学校で扱い、小学校段階では取り扱わないとしている(文部科学省, 2008, p. 19)。現時点では、綴りの指導を含め文字指導は、中学校の前倒しとなり、授業がうまくいかなる一要因となる可能性があり、週 1 回しかない外国語活動においては避けた方が良いと思われる。

4) 指導内容の偏り

- ・ゲームだけで終わる時。
- ・ゲームばかりに熱中して、外国語の使用がおろそかになる時。
- ・ゲームなどが盛りだくさんで、その時間のねらいがあいまい。
- ・活動は活発だが、知的でなく、子供の力を伸ばせていないと感じている時。
- ・ルールそっちのけで、ゲームを進めることに没頭している子供がいる。
- ・決まったゲームの繰り返し。
- ・ゲームの勝ち負けで、「楽しかった」「負けて面白くなかった」という感想で終わってしまう時。

いずれも、授業の内容がゲームに偏ってしまい、児童が英語学習よりもゲームに夢中になってしまっていることを表している回答例である。ゲームは楽しいが、ゲームを行う際に必要な英語の表現をきちんと聞いたり、話したりすることをおろそかにしてはいけないことを、学級担任は認識しているのである。そのためには、英語の表現を使用する必然性のある場面を、ゲームの中に設定する必要がある。授業がうまくいったと感じる時の具体的指導法として、すいか割りのゲーム活動があったが(上述の「9) 教材・指導法に関する記述」を参照)、あの活動では どうしても “Go straight.” “Turn right.” 等の表現を使わないと、目的を達成できない。英語を使う必然性のある場面をいかに活動の中に取り組みんでいくかが大切であり、そのための教材研究が必要となる。

5) 教師の発言・指示に関する記述

- ・活動内容ややり方が子供たちに伝わらなかった時。
- ・活動内容がうまく伝えられず、活動が止まる時。
- ・教師の説明が多く感じる時(児童の表現があまり活発にみられない)。
- ・ゲームの内容を複雑にしすぎて、子供たちにうまく指示が伝わらない時。

これらの回答例は、児童が授業がわからない、あるいは児童の反応がなくなる原因の一つとも言える。おそらく、英語で指示を出して児童にその内容が伝わらなかったことによる回答例と思われる。あるいは、ゲーム等のルールを複雑にしすぎて、結果として指示も複雑になってしまった可能性もある。他教科同様、指示は短く、わかりやすくて大切であるが、学級担任が英語で指示をする場合であれ、ALT が指示をする場合であれ、児童にわかるように、できるだけ簡単な指示を言うことが大切である。必要に応じて、日本語による指示も必要である。どのような指示が適切かについては、クラスルームイングリッシュも含めて研修が必要である。

6) TTに関する記述

- ・ALTとのコミュニケーションがうまくいかず、学習過程がスムーズに進まなかった時。
- ・ALTとのコミュニケーションがうまく取れず、指導にずれがある時。ALTの指導が子供と1対1の時や、ゲームのルールがいろいろ加減。子供の集中力や意欲がなくなる時がある。
- ・ALTがいつも主になってしまい、HRTの思いをなかなか共有できない。

これらの回答例は、学級担任とALTとの間のコミュニケーションが十分成立せず、なかなか学級担任の思いが授業に反映されない記述である。やはりALTとの打ち合わせは大切であり、学級担任は学習指導目標をALTに理解してもらう必要がある。そうでないと、ALTは学級担任の意に反するような指導を行う可能性がある。授業がうまくいったと感じる回答例の中に、TTにおいて学級担任が主導権を取ることができた時との回答例があったが、上の3つ目の回答例はいずれもその反対の記述例である。TTにおいて学級担任が主導権をとることが大切であり、そのための授業計画、ALTとの打ち合わせ等、学級担任の果たすべき役割は大きい。

7) 児童の二極化に関する記述

- ・スピードを上げた指導で、塾などに行っている子のみが楽しんでいる。
- ・個人差があり、子供によって少し難しい内容に取り組む時、理解できず、苦しんでいる。
- ・発音に自信ある子ばかりが目立ち、自信のない子がますます元気をなくしてしまう。
- ・特定の子だけが意欲的になっている時。
- ・英語ノートに沿って進めようとすると、英語を習っている子供たちは生き生き、その他の児童は不安がる。

これらの回答例は、英語の得意な児童とそうでない児童の二極化に関する記述である。現実、どのクラスにも英語教室へ通っている児童は存在すると思われる。仮に、TTにおいてALTが主導権を握り、英語で授業を進め、学級担任もALTにほぼ授業を任せてしまうと、英語教室に通っている児童だけが授業中発言をし、通っていない児童はその授業について行けなくなる可能性がある。また、わずか週1回の英語の授業であるが、学習事項の定着、言い換えれば、英語のスキル養成を目標とすると、授業のわかる子とわからない子の二極化は進んでいくと危惧される。外国語活動ではコミュニケーションを図ろうとする態度の育てること、外国語の音声に慣れ親しませることが大切であるから、英語教室に通っていない児童でも内容のわかるような授業を、学級担任がALTを活用しながら展開することが大切となる。英語学習の面から言えば、英語の音声を聞くことに重点を置き、英語を話す能力や英語の読み書き能力を養成することは小学校段階では求める必要はないと思う。金森(2011)は、二極化の原因を、外国語活動がスキル養成になっていることとしており、同様の考えを述べ、さらに、1クラス30人以上の公立学校で、英語教室のように英語のスキル養成をすれば、当然英語の苦手な児童が出て、英語嫌いな児童をたくさん生みだすとも言う(pp. 74-75)。

8) 学級担任の英語力に関する記述

- ・指導者自身がうまく発音できない時。

- ・(教師)自分自身が理解できない ALT の会話。
- ・ALT の先生の話の内容が私(教師)がうまく理解できず、子供に伝わらず、活動が停滞する。
- ・英語での会話の仕方について、子供に尋ねられても答えられないことがある。
- ・英語力不足から、ALT との会話がスムーズに行かない時。
- ・私の力不足でいい授業ができない時。時間があれば、ALT との打ち合わせができる。
- ・教材研究不足・英語力不足も大きく関係している。
- ・(自分の)発音が良くない。説明をほぼ日本語でしてしまう時。
- ・見本を見せる時に、英語がうまく話せず、子供に伝わらなかった時。
- ・自信をもって児童の前で英語を話すことができない時。

これらの回答例の大半は、学級担任の英語力、とりわけ英語を聞いたり、話したりする英語運用能力に言及している。TTにおいて学級担任が中心となって授業を進める際、児童やALTに英語で指示を出す必要があり、学級担任にはある程度の英語運用能力が必要とされる。ALTとの事前打ち合わせが必要であるから、なおのことである。校内外の教員研修によって、外国語活動やそのためのALTとの打ち合わせで必要とされる英語の表現や英会話力などを身に付ける必要がある。上述したが、これは短期間で達成されるものではないから、少しずつ積み重ねなければならないと思う。学級担任の英語力に関して、金森(2011)は、授業を進行するために必要なクラスルームイングリッシュをある程度できるようにしておけばよく、学級担任は大学まで英語を学んでおり、英語についての相当な知識を備えているから、コミュニケーションのモデルとなればよいと主張する(pp. 62-63)。しかし、指導案で用いる英文の適切さを判断したり、ALTとの打ち合わせをしたり、コミュニケーションのモデルとして児童の前で英語を使用するためには、ある程度の英語運用能力は必須である。そうでないと、担任は自信をもって、児童の前に立てないのである。結果として、ALTにお任せするような授業になってしまうことが多々ある。やはり、外国語活動を実施する上で必要な英語力を、ある程度学級担任は習得する必要がある。この点に関して、国は現職教員研修を地方自治体に任せるのではなく、国の施策として是非、人・予算をかけてほしいものである。

9)準備に関する記述

- ・教材の準備がうまくできない。
- ・教材研究不足。
- ・時間にゆとりがなく、指導法が広がらない。(電子黒板の活用など)
- ・ALTとの打ち合わせが十分できない。

これらの回答例からは、学級担任はALTとの打ち合わせや教材研究の必要性は認識しているものの、多忙な学校生活ではその時間をなかなか捻出できていないことが推測される。特に、英語が苦手な学級担任にとってはなおさらである。外国語活動に関する教員研修を個々の教員に任せるのではなく、学年単位あるいは学校全体で、時間を確保しながら校内研修を進めることが考えられる。学校によっては、月1回30分程度、指導法について校内研修を実施しているところがあると聞く。このような研修体制を設ける上で、管理職のリーダーシップは欠かせない。さらには、上述したように国策としての教員研修も必要

である。

以上、授業がうまくいかなかったと感じる時の回答例を 1) 児童が授業がわからないことに関する記述, 2) 児童の反応に関する記述, 3) 指導内容・指導法に関する記述, 4) 指導内容の偏り, 5) 教師の発言・指示に関する記述, 6) TT に関する記述, 7) 児童の二極化に関する記述, 8) 学級担任の英語力に関する記述, 9) 準備に関する記述の観点から、紹介し、その原因についても言及してきた。授業がうまくいかなかったと感じる原因はいくつか考えられる。一つは ALT に授業をお任せにしていたり、ALT との打ち合わせが不十分であることが考えられる。そのために、ALT が英語で授業を進め、児童も学級担任も授業内容が十分わからないままになっている可能性がある。当然、そのような授業では児童からの反応は乏しくなる。二つ目は、中学校の前倒しのような英語のスキル養成を主眼として、授業を実施していることが原因として考えられる。その結果、英語教室に通っている児童のみがわかるような授業となり、英語教室に通っていない児童にとってはわからない授業になっている可能性がある。週 1 回の英語の授業では、英語のスキル養成は相当困難である。仮に授業が週 2 回になったとしても、同様である。三つ目は学級担任の英語力不足が原因による英語苦手意識である。なかなか英語に対して自信を持っていないために、ALT に授業をお任せにしたり、打ち合わせも不十分なままになってしまう。四つ目に、外国語活動の目標や指導法についての理解不足が考えられる。外国語活動では何を目標とするのか、どのような活動をするのか、どのような指導法が適切なのかなど、ある程度研修を積む必要がある。そうでないと、安易に授業内容がゲームに偏り、ゲームの勝ち負けが主となり、人と関わろうとするコミュニケーションを図ろうとする態度の養成の面がおろそかになってしまったり、ALT に授業を任せたり、あるいは、英語のスキル養成を主眼とするような授業になってしまう。五つ目に、教員研修が相当な部分、個々の小学校教師に委ねられており、多忙な学校生活ではなかなかその時間を確保するまで至ってはいないのではないかと思われる。さらに、学校全体としても、外国語活動の教員研修に関して取り組みも不十分であると考えられる。

外国語活動の改善に向けて

外国語活動の改善に向けて、授業がうまくいかなかったと感じる原因を取り除くことは当然である。まず、英語教室に通っていない児童にとっても、内容がわかる授業を実践する必要がある。そのためには、学級担任は ALT には授業をお任せにはせず、授業内容や授業の進行をコントロールするように努めることは必須である。それに必要な ALT との打ち合わせ時間の確保、学級担任の英語運用能力向上および意識改革も必要とされる。次に、中学校の前倒しのようなスキル養成を第一義とした授業目標を立てず、外国語活動の本来の目標であるコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を主眼とするべきである。現職教員研修であるが、校内外両方必要である。学級担任が自信をもって児童の前に立てるように、英語運用能力の向上を図ることは必要である。国が責任を以て、人・予算をかけてほしいものである。さらに、研修では、コミュニケーションの必然性のある場面を教師自身が体験することも重要である。そのような体験がないと、授業案を作るにしても、ただ英語を暗記するような活動に陥ることになってしまう。いずれにせよ、外国語活動の教科化に向けて、課題は山積している。長い目をもって、教員研修を積み上げることが、何よりも大切であると思われる。

本研究の課題

本研究は、アンケート調査の中の自由記述項目への小学校教師の回答をカテゴリー化し、分析した。特に、授業がうまくいったとの回答例には具体的指導法があまり見られなかった。一方、授業があまりうまくいかなかった時の回答例には、ゲームに偏った授業や中学校の英語の授業の前倒しをする指導法が観察された。しかし、これらのデータは、外国語活動の授業を見学し、学級担任に直接インタビューして収集したわけではない。実際に小学校を訪問し、外国語活動の授業をある程度の期間にわたり参観し、児童および学級担任から、複数回面接等によりデータを収集することが必要である。そのようなデータを積み上げ、より質的分析方法が今後は必要である。

注

- 1) 小学校教師の英語の教員免許所有者は、ベネッセ教育開発センター(2010)の調査では 9.4%、真歩仁・猪井(2014)では 9.6%であり、ほぼ9割の小学校教師は英語の教員免許を所有していないことがわかる。
- 2) この小中連携の研究の代表者は真歩仁しょうん(福島大学)であり、筆者は研究分担者である。

謝辞

本研究のアンケート調査にご協力いただきました日本全国の先生方に、心より御礼申し上げます。また、本研究は平成 23 年度～25 年度科学研究費補助金(基盤研究 C(1))23520743(代表: 真歩仁しょうん、分担: 猪井新一)および平成 24 年度～26 年度科学研究費補助金(基盤研究 C(1))24531099 (代表: 猪井新一)からの助成を受けております。

引用文献

- 金森 強 (2011) 『小学校外国語活動 成功させる 55 の秘訣—うまくいかないのには理由(わけ)がある—』 東京: 成美堂
- 直山木綿子 (2008) 『ゼロから創る小学校英語』 東京: 文溪堂
- ベネッセ教育開発センター(2010) 『第 2 回小学校英語に関する基本調査(教師調査)』
http://benesse.jp/berd/center/open/report/syo_eigo/2010/index.html (2011/09/18 閲覧)
- 真歩仁しょうん・猪井新一 (2014) 『小・中学校の英語学習・指導の一致性に関する調査』 平成 23 年度～25 年度科学研究費補助金(基盤研究 C(1))23520743 研究成果報告書
- 文部科学省 (2008) 『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』 東京: 東洋館出版社

文部科学省（2011）『小学校外国語活動研修ガイドブック』東京：旺文社

矢野 淳（2011）「小学校外国語活動必修化に伴う解決すべき問題点」『静岡大学教育学部研究報告
教科教育学編』42, p.57-66. <http://hdl.handle.net/10297/5685> (2012/07/07 閲覧)